一九九〇年四月一〇日頃のことでした。「尊師のご自宅に行ってください」と、私はCBI（教団の建設班）のあるメンバーから告げられたのです。

教団前にも私は麻原から彼の自宅に呼び出され、「家族に執着している」などと、当時の心境についての質問を受けていました。普段とは異なり、麻原の側近は同席せず、一対一です。この状況でも相変わらず、そのような話のために、なぜ呼ばれたのか、私には理解できませんでした。

再度の呼び出しに、今度は何だろう〜と思いながら、私は第一サティアン一階のCSIの工リアから、麻原の自宅がある四階へと向かったのです。

麻原の自宅のやや広い部屋には、何人かの出家者が既に集まっていました。最終的な人数は約二〇人。半分以上が古参の大師であり、教団の重要人物も召集されていました。私の同輩もいましたが、その場の顔ぶれからは何のための会合か予想できませんでした。

やがて麻原が、*村井秀夫ら三人の出家者と談笑しながら姿を現し、緊張するような雰囲気ではありませんでした。そして麻原が、いつものソファーに身を沈めると不意に私どもに指示しました。

「今からする説法は録音しないでください。メモも他言も無用である」

その意味を深く考える暇を与えられないまま、私は麻原から問われました。

「*サンジャヤ。今、上九でつくっているもので何をするか分かるか」

上九でつくっているもの——少し前に私は村井から、何らかの菌の培養を指示されたことがあったのです。

上九の敷地は、私が生活していた富士山総本部道場とは約七キロメートルの近距離でしたが、高原のため気候の様相は異なり、四月になってもみぞれが降る寒さでした。その敷地内に設置されたトレーラー用のコンテナの中に、村井は私を案内しました。

薄暗い、雑然とした物置きになっている室内の奥のスペースには、私が同僕と作成したばかりの恒温槽（ステンレスのドラム缶製）が据えてあり、菌が既に培養されていました。

「コンテナの中に誰も入れないように」

村井は指示しました。

私の任務は一週間にわたり、恒温槽の番をすることでした。

別の大師からは、六時間毎に槽の中の培養液のペーハーを測定して報告することと、培養液のサンプルを届けることをおせられました。また、この作業の際の注意も受けました。培養液が周囲に飛散したら、そこを水酸化ナトリウム水溶液で消毒するように……。

*1 村井は、オウムの科学班のリーダー。麻原の第一の側近であり、教団の破壊的活動においては中心的役割を果たした。

*2 サンジャヤとは、「私の宗教名」。一九八九年一一月一七日に第一段階目の解脱・悟りを認められた際、麻原から与えられた。

何事もなく私が任務を終えると、医師の出家者が私に一袋のブドウ糖を点滴しました。「尊師からのイニシエーションです」と。そのイニシエーションには、風邪薬を服用したときのようなしびれを身体に感じたので、薬品が含まれていたようでした。

菌の培養のほかにも、その頃に指示された仕事が次々と私の意識にのぼってきました。*衆院選後、教団は本支部を閉鎖し、出家者は交代で、富士山総本部道場における五日間の極厳修行に入れられています。ところがCSIのメンバーは修行に入れられず、至急の仕事を命じられていたのです。

私は麻原から、教団が製作する気球の上昇高度の計算を指示されました。また村井からは、工業用のフィルターの調査と購入を指示されました。菌を大規模に培養し、その菌から何らかの生産物を得るために使用すると。

そのほかの指示も重なり、あわただしく日々が過ぎるうちに教団にも動きがありました。麻原が出家者に対し、四月二四日に石垣島にてイニシエーションを与えると発表したのです。また現地にしばらく滞在し、修行するとも。そして本支部所属の出家者は麻原の厳命によって持ち場に戻り、このセミナーへの参加を在家信徒にも死に呼びかけている状況でした。

この一連の出来事が示す解は、一点に収束しました。

「上九でつくっているものを気球に載せ、世界中に撒くのではない」

ですか。そうすると、撒かれたところにいる生物は、生命の危機に瀕します。今度の石垣島でのセミナーでは、イニシエーションとして、その菌に対する抗体が与えられるのではないですか」

現実離れした回答が唐突になされたことについて、奇異に思われるかもしれません。しかしそれが、オウムというコミュニティーでした。閉鎖的環境においてヴァジラヤーナの救済が説かれ続けたために、教団では規範意識が一般社会のそれとは乖離し、その救済

―人々の生命を絶ち「ポア」することを受け取られていたのです。―の実行は当然のことと

して麻原は果たして

「そうか、分かっていたのか」

と、感慨深げに応じました。そして再び私に問いました。

「表面的なことはすべて分かっているようだが、深い意味はどうだ」

「現代人は悪業を積んでいるから上九でカルマ落としをするのですか」

私の回答に触れることなく、麻原は説き始めました。

現代人が悪業を積んでいるために、地球が三悪趨化し、宇宙の秩序が乱れている。それを我々が正さなければならない。これから上九で培養するのは、ボツリヌス菌である。この菌が生産するボツリヌストキシンは、少量でも吸い込むと呼吸

*1 一九九〇年二月一八日の衆院選に、麻原ら教団関係者二五人が出馬し、全員が落選。教団の宗教法人格の取得が妨害されたことにより、救済活動には政治力が必要だと麻原が訴えて出馬した。

中枢に作用し、呼吸が停止する。そして*1サマディーに至り、ポアされる。

このポツリヌス・トキシンを気球に載せ、世界中に撒く。これは、第二次世界大戦中に日本軍が行った「風船爆弾」の方法である。中世ヨーロッパでペストが流行したときは黒死病といわれたが、今回の病は自死病といわれるだろう。

ここで、なぜ我々がやらなければならないのか、*2これは本来、神々がやることだが、神々がやらないから我々がやるんだ。

そして、天変地異を使い、残すべき者を残せない。真理の実践をさせる。縁ある者を地球に転生させて、

今回の衆院選は、私の*3ハーヤーナの救済のテストケースだった。その結果、ハーヤーナでは救済できないことが分かったから、これからはヴァジラヤーナでいくことだが、私もだいぶ悩んだんだ。なぜなら、ちょうど一年前にもこのようなことを言っていたよ。*4

この二週間のワークは精神的・肉体的に厳しいだろうが、この二〇人で行う。*5

かくして麻原は、ヴァジラヤーナの救済の開始を宣言したのです。

いつしか、その場は厳粛な雰囲気に包まれ、私どもは説法に聞き入っていました。

説法中唯一、麻原の感情が動いた瞬間がありました。「この二週間のワークは精神的・肉体的に厳しいだろうが、この二〇人で行う」と。

私どもに語りかけたときです。

その声の波動を聞き、人々が失われることについて、私は一抹の寂しさのようなものを感じました。麻原の心の動きに感応したのようにしかし、その感情はそれ以上、広がることも深まることもありませんでした。

当時の私の様子を間近に見ていた出家者は述べています。

*1 サマディー（三昧）とは、宗教的に高度な瞑想状態。呼吸が停止するとされる。

*2 麻原は本説法に先行して同年三月二四日、「神々が秩序を戻す」と出家者に説いていた。

「人間の魂がもっともっとけがれ、そして第四期、破壊の直前になると、タントラヤーナの修行（オウムでは、煩悩を利用（昇華）して修行する方法とされた）においても救済できない。そういう魂の世界が人間界に形成されます。ここで登場してくるのが、ヴァジラヤーナ、つまりプラース、力を使って、武力を使っての破壊です。なぜならば、この欲六界の、例えば地獄の世界、餓鬼の世界、動物の世界、人間の世界、阿修羅の世界、そして戯忘天の世界、これらの世界は一つ一つ役割があり、その心の働きによって形成されなければならないからである。ということは、例えば人間の世界が動物化したり、あるいは動物の世界が餓鬼化したりすると、その世界の形成バランスというものが崩れます。そして、その世界の形成をコントロールしている神々がいて、その神々がその秩序を元に戻そうとします」（ロヴァジラヤーナコースは教学システム教本四）

*3 マハーヤーナ（大乗）の救済とは、オウムでは合法的な布教によるお救済の意味。

*4 このようなことは、ポツリヌス・トキシン散布計画のようなこと。

*5 ここに記したのは、麻原の説法の要約、この順番どおりに説いたかは、定かではない。

この話し合いの中で、麻原氏は、そこに呼んだ三〇名ほどの弟子の中から広瀬氏を指名し「何をどんな目的で作っているか分かるか」という趣旨の質問をしました。それに対して、広瀬氏は「おそらく、毒性のある細菌を作って、世界中に散布しようとしているんだと思います」と、麻原氏の方を見て、過不足なく、あっさりと答えていました。言いよどむことなく冷静に答えていた様子をよく覚えています。

同席者の多くは、全員ではないかもしれませんが、私と同様の心理状態だったのではないでしょうか。その後の作業の状況から察しますと、ここで麻原は、ホツリヌス・トキシンを世界中に散布することによって、「アビラケツノミコトになれ――シャンバラの実現のために戦え――」との啓示を行動に移そうと意思したといえるでしょう。そして、縁ある者を残せない者を残せば、真理の実践をさせる」とのシャンバラの建設を意図し実地球に転生させて、真理の実践をさせる」とのシャンバラの建設を意図し実践する者のみが住まう理想国家、つまり一九八八年一の月二八日の観みたいたことがうかがえるからです。また、シャンバラの建設を意図し実説法においても、自身がアビラケツノミコトであることを観みた上で、「今の人間よりも霊性のずっと高い種、これを残すことがわたしの*役割なのかもしれない」と、軌を一にする考えを述べているからです。麻原はオウム関係者のみを生き残らせ、シャンバラを地球上に実現しようとしたのです。

このヴァジラヤーナの救済を麻原が行動に移したのは、自ら述べているように、衆院選での落選と考えて矛盾はありません。その躓きによって麻原は、現代人は救済し難いとの認識をより深め、かから衆生を救済する手段といわれるヴァジラヤーナへと舵を切ったのでしょう。それが、「マハーヤーナでは救済できないことが分かったから、これからはヴァジラヤーナでいく」という言葉の意味が分かったのです。本質的には前述のように、衆院選での惨敗という刺激が加わって、ヴァジラヤーナの救済の野望が臨界近くまで達していた麻原に、衆院選では、「なお、額面どおりに受け取れない部分があります。それはむしろ、落選する結果に終る衆院選に出馬したことの正当化でしょう。

まず麻原は衆院選について、落選を最初から承知の上で敢えてストレートという状況ではなく、当選を目指して真剣に取り組んでいましたと。たとえば一九八九年一二月から翌年一月頃、麻原は私に電話で、「わしは当選するかどうか心配じゃ」、「麻原を一泡吹かんだよ」と漏らしたり、「衆院選に関する報道で、麻原を一泡吹かんだよ」と言っていたりしていたのです。

*1 第二章第四節一頁参照。

一方ヴァジラヤーナの救済の実行については、衆院選出馬の前から一貫して麻原の念願にあった可能性は否定できません。事実、麻原は一九八九年七月に衆院選出馬を出家者に発表した後も、ヴァジラヤーナの救済を説き続けていました。特に同年九月二四日には東京本部道場（世田谷）において、当時としては例外的に、社家信徒にまでポアを説いたほどです。*1 ですから、麻原は政界進出を目指しつつ、ヴァジラヤーナの救済を意思していたのかもしれません。

麻原は説法を終えると、私どもの一人一人に任務を与えました。上九にプレハブ棟を建設し、その中にポツリヌス・トキシン生産プラントを製作するのはCBIの担当。プラントの設計とプラントの制御盤、AM放送局程度の出力の送信機（電話等が不通になることを想定しての通信用）、気球の各製作は主にCSI。ボツリヌス菌の大量培養のための種菌の準備は主にCMI（教団の医学班）。ボツリヌス・トキシンの各生産工程、すなわち菌の大量培養（容量10m³の培養槽×四基）、トキシンと菌との分離、トキシンの乾燥・粉末化に関係する作業は主に大師。*2 私は菌の大量培養の責任者を命じられました。

また麻原は、「このメンバーは、石垣島へは行かない」と明かしました。石垣島でのセミナーは、教団関係者の避難が目的だったのです。ボツリヌス・トキシンを搭載した気球は偏西風に乗せて拡散する予定でしたが、石垣島は偏西風の経路から外れているわけです。この計画の従事者は、セミナーが開催されている頃に気球を放った後、富士山総本部道場に用意された気密室に避難する段取りでした。*3

この会合の最後に、麻原は私どもに「直ちに作業にかかれ」と指示しました。その号令に従い、私どもは時を移さずに任務に就いたのです。普段と変わりなく。

*1 密教の戒によると、麻原が説いたヴァジラヤーナの救済の類の教えは、それを聞く資格のない者（聞くとその教えを誤解する可能性がある者）に対して説くと、説いた者は無間地獄（最も苦しい地獄）に堕ちるとされる。そのため麻原は、その教えを在家信徒に説くにあたっては、（多少は）慎重な姿勢を見せていた。

*2 麻原が大師を作業員として選んだ理由は、この計画は宗教的行為なのだ、宗教的に高ステージの者が従事すべきと判断したからだろう。大師のステージに達していない者は、所属がCBI・CSIなどであり、技術者としての効果とされた。

*3 実際は、作業現場の安全対策は杜撰であり、ボツリヌス菌の培養に成功していたら、私どもが真っ先に死んでいただろう。一滴も作業に携わる頃には効果が消失するとされていた。